

「昭和20年松橋空襲と墜落米軍機」 ※裁判資料抜粋

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク

I 松橋（宇土・川尻も一部含む）空襲の概要

1 日本側証言・記録

該当する松橋町と隣接の宇土市・熊本市川尻への空襲に関する日本側の記録（『不知火町史』・『宇土市史』他）及び証言（分部・夏目氏証言は著作本及び日聞き取り）による。以下抜粋のとおり。

（1）昭和20（1945）年7月27日

□松橋 「爆弾攻撃の目標は、駅と永代橋の鉄橋だった。駅舎には命中し、左半分が破壊された。（永代）鉄橋は無事だったが、近くの畑や草地には大きな穴が幾つも残った」。駅舎南側半壊、死者22名、天満屋・ミナト屋薬局全焼、明覚寺に遺体多数。「上空から石油をまき機銃掃射」「あちこちに空になった飛行機の石油タンクが落ちていた」

□不知火 高良で家屋全焼50軒、死者3名、負傷者多数。御領で家屋全焼3軒

□宇土 築簗町の日本合成株式会社宇土工場（熊第八一三一工場、製造は航空機塗料としてのアセトン、航空機燃料のブタノール、クロロブレン合成ゴム）が、5月14日に次ぎ攻撃を受ける。8日も含め計5回となる。

（2）同年8月6日

□川尻 緑川鉄道橋梁に「爆弾78発が投下され、橋桁が損傷し、機関車3両が被害をうけ、内1両は橋梁から落ち水没した」

（3）同年8月7日

□松橋 松橋市街地の新町（6区）で6軒全焼、機銃掃射。なお「この日に高射機関砲等の反撃は知らないが、終戦後に松橋高女（筆者註：現松橋中学校）に集められた武器に複数の高射機関砲を見た」との証言あり。

□不知火 松崎地区で「8軒全焼、死者2名、負傷者2名」

□宇土 船場地区の缶詰倉庫全焼、宇土合成工場の小規模攻撃

□川尻 国道3号線緑川橋への銃撃が行われ、その際のガンカメラ写真4枚が残されている。

（4）同年8月10日 ※第2回熊本大空襲

□松橋 市街地全域2～5区への焼夷弾攻撃で、2・3区各1軒、4区10軒、5区12軒が焼失

□不知火 塚原地区では全焼家屋91軒、負傷者多数

□宇土 「米軍戦爆連合210機の大編隊が宇土町を襲ったのは、10日午前11時頃であった」。宇土市の本町・新町通りの大部分で、被災建物は宇土国民学校・宇土郵便局・伝染病院避難舎・日本合成宇土工場・宇土駅等で、被災面積45000坪、被災家屋301軒、罹災人口1431人、死者38人



図1 宇土城跡から見た松橋方面の空襲 夏目氏資料

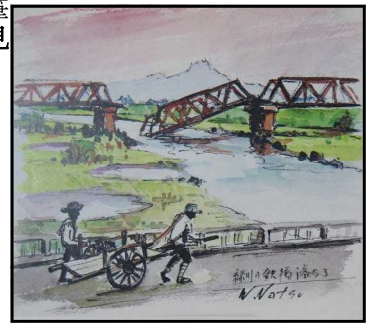


図2 鉄橋中央部桁が落ちた緑川橋梁 夏目氏資料



図3 松橋駅の惨劇



図4 明覚（みょうかく）寺境内に並べられた松橋空襲ご遺体
昭和20年7月27日の空襲様子 夏目信彦氏著『記憶のなかの色紙』より

2 米軍側資料・記録

松橋空襲に関する第5航空軍「Weekly Intelligence Review」が、工藤洋三氏により米国立公文書館で確認された。工藤氏に和訳文と併せタイプ打ち資料を提供いただいた。

(1) Matsubase and Kawashiri 「松橋と川尻」

1945/8/7 11:55-12:10

345 GP B-25 43

9 a/c turned back from mission due late T/O that forced them to miss fighters.

34 a/c dropped 54x1000s and exp

78100 x 50 cal and 67x5" rockets. At Matsubase, a train with 8-10 cars and RR bridge were bombed -- At Kawashiri

1/3 of Hwy bridges was severely dmgd by dir bomb hits, --

1945年8月7日 攻撃開始11:55- 攻撃終了12:10

第5爆撃機集団 第345爆撃機群団

陸軍中型爆撃機B-25機 43機

9機は出撃時刻が遅れて、戦闘機と会合できず引き返した。

34機は54発の1000ポンド爆弾を投下し、

5インチの機銃弾を78100発、

67発の5インチロケット弾を使った。

松橋では列車8~10台(両)の鉄道車両と

鉄道橋(RRブリッジ)が爆撃された。

川尻で道路橋(自動車道橋)の1/3は、直撃によってひどく破壊された。



写真1 沖縄伊江島基地から離陸するB25機 工藤洋三氏提供

(2) Railroad Bridge at Kawashiri 「川尻鉄道橋」

1945/8/12 16:05-17:00

58 Gp P-47 26

Dropped 16x1000 pndrs at bridge, hitting N approach and causing no damg. Dropped 3x165 gal naps on A/A posits.

N end of bridge, causing fires with smoke to 1500' & damg

bldgs, 4x1000 pndrs dropped at bldgs, radia antennas at 3100N-13040E, --

1945年8月12日 攻撃開始16:05- 攻撃終了17:00

第5戦闘機集団 第58戦闘機軍団 陸軍戦闘爆撃機P-47 26機

(川尻の)橋梁で1000ポンド爆弾16発を投下し、北側の入口を攻撃したが、損害はなかった。

橋の北端の防空陣地に165ガロンナパーム弾を3発投下、火災を発生させ、

煙は1500フィートの高さまで上昇し、建物に損害を与えた。

さらに北緯31度00分・東経130度40分で、1000ポンド爆弾4発を建物と無線アンテナに投下、2棟の建物を破壊した。



写真2・3 1945年8月7日の川尻町「緑川道路橋」、「北側集落」への攻撃
国崎潤氏資料・くまもと戦跡ネット提供

Ⅱ 永代橋梁

1 来歴

- 鹿児島本線複線化に伴い九州鉄道時代の急曲線「本橋梁を含む本区間」は廃線。旧国鉄より昭和53（1978）年8月11日に旧松橋町・不知火町に無償譲渡され、**現在は宇城市所管**
- 施工時期及びその後の改修等については調査中。宇城市所蔵の管財台帳には設置時期の記載なし。橋梁構造図等の図面は無し
- **橋脚・橋台部の建築年代は、九州鉄道株式会社により、本区間開通時期の明治29（1896）年と想定される。**ただし、鉄橋本体（主桁鋼材）については、蒸気機関車大型化に伴う耐荷力アップ時の掛け替えも想定できる。継続した調査が必要である。
- 鉄橋本体（主桁鋼材）への銘板・製造プレート の設置、刻印は立入ができず未調査

2 構造と特徴

本稿部分は、県土木部OBの戸塚誠司氏（現在は民間コンサル会社勤務）、熊本産業遺産研究会会員から専門的助言をいただいた。

- 下部構造（躯体）は、橋脚2基・橋台2基で構成
- 上部構造は、桁連数三連の「三径間単純鈑桁（ガーダー）橋」、橋長40.74mを計測
- 主桁は「デッキ（レール敷設箇所が桁の上面にある上路）式・左岸一連」及び「スルー（桁下面位置にある橋床に縦桁を設置し、床組みで橋面とする下路）式・右岸二連」の併用形式である。**本橋梁に見られる「併用（混用）形式」例は僅少で、特殊な経緯を想定される。**
- 左岸側一番目橋脚は、煉瓦造（イギリス積み）と花崗岩切石での構成。西側には支承2基、東側には4基、上流側には角石（花崗岩切石15段）を有し、橋脚平面幅1.50m、全長6.07m、地上高3.50mを測る。
- 橋脚の角石は上流部だけを、平面形状「三角形」にした水切り構造の先（尖）端部を有する。この構造は石造アーチ橋では類例を見るが、石造・煉瓦造の鉄道橋脚での事例は希少と思われる。
- 左岸側橋台は全長4.27m、全高2.35mを測る。
- 左岸側橋台と左岸一番目橋脚の純経間は、12.58mを測る。
- 九州鉄道時代の**貴重な鉄道・近代化遺産**であり、全体構造等の継続調査が必要と思われる。



写真4 大野川に架かる旧国鉄「永代橋梁」全容（上流側より） 写真5 同全容（下流側より）

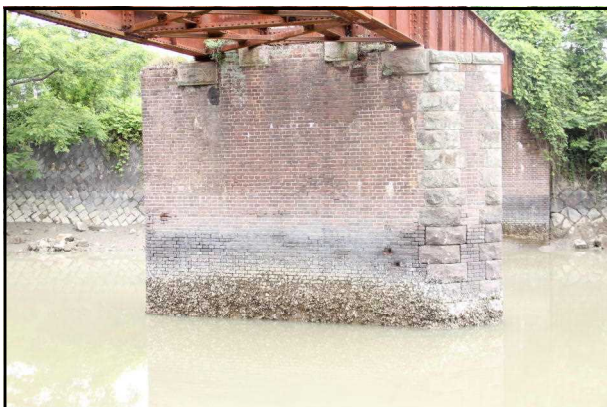


写真6 第2橋脚西面全景と爆弾痕跡

写真7 第1番橋脚西面の機銃弾・弾痕状況



写真 8 第 1 橋脚南面の弾痕状況 写真 9 同橋脚先端部の角石状況 写真 10 同橋脚機銃弾痕跡

3 橋梁第一橋脚への爆弾痕跡と機銃弾跡

- 第一橋脚西側・南側について写真撮影によるオルソ図・実測図を作成した。
- 橋脚西側では、12.7mm機銃弾跡2箇所（赤実線表示）、大小の爆弾破碎痕跡24箇所（青破線表示）が確認できた。痕跡を3グループに想定できた。
- 機銃弾痕跡2箇所は、いずれも北側（上流）からの斜め俯角での射角であり、最深部は12cmに及ぶ。内部は一部コンクリートが充填されていた。
- 橋脚南側では、大小の爆弾破碎痕跡15箇所（青破線表示）が確認。痕跡を3グループに想定できた。
- なお、立入規制のため主桁鋼材への機銃弾痕跡は確認していない。

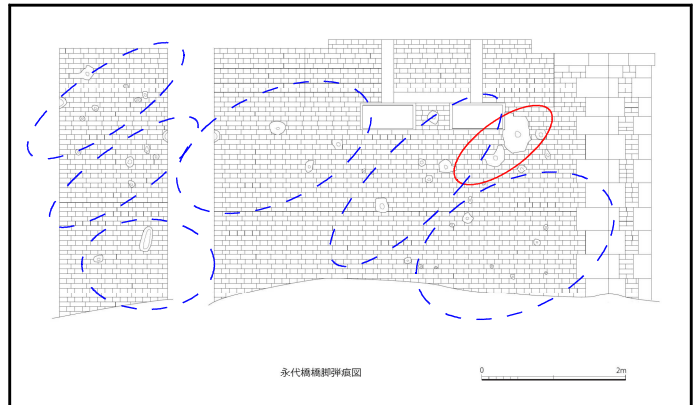


図 7 第 1 橋脚西面のオルソ図

図 8 第 1 橋脚西（右図）・南（左図）の爆弾・機銃弾痕跡図

なお、永代橋梁爆撃について、夏目氏著作より該当箇所を引用する。

- 「鉄橋狙われる」～鉄道の橋梁を狙って爆弾が投下された。橋脚脇にそれて、道路が爆破された」
- 「爆弾の跡」～永代橋から檜の柄橋まで幾つも爆弾の大穴が開いた」
- 「機銃弾と爆弾の破片」～持った感触は重い鋭い、冷たいという表現ができる。この一発で死にいたる威力があった」
- 「機銃弾の弾痕」～機銃弾の入口は2センチぐらい。出た穴は大きく板はヒビわれして、2～30センチに見えた」



図9「鉄橋狙われる」 図10「爆弾の跡」 図11「機銃弾と爆弾の破片」
夏目信彦氏著『記憶のなかの色紙』より

Ⅲ 松橋空襲に伴う鏡川河口への墜落米軍機、搭乗員

1 墜落機体

- North American 「B-25」 Mitchells J型機
- 第5爆撃機集団 第345爆撃機群団 第498戦隊所属機
- 機体型番：4-31300 機体に通称は「エアパッチ」
- 墜落日：1945年8月7日 墜落地：熊本県旧鏡町鏡川河口

2 墜落機搭乗員

※写真11 参照

- 主パイロット Robert G. Neal大尉
認識番号0-833189
NY Buffalo出身（後列左 ロバート・ニール）
- サブパイロット Louis J. Winiecki, Jr大尉
認識番号0-831874
NY Lancaster出身（後列右 ルイス・ウィニッキ）
- 航法士 Richard S. Lane 大尉
認識番号 0-558308
NJ Ridgewood出身（前列左 リチャード・レーン）
- 機関士 Robert W. Goulet 軍曹
認識番号 32839871
NY出身（前列中 ロバート・グワレット）
- 通信士 William Cohen軍曹
認識番号 32975702
NY New York出身（前列右 ウィリアム・コーエン）



写真11 1945年8月7日、八代海に墜落したB25機の機長・搭乗員

3 陸軍中型爆撃機「B25」ミッチェル

米陸軍中型爆撃機B25ミッチェルは、ノースアメリカン社が開発し、陸軍航空軍や海軍で運用された爆撃機である。第二次世界大戦において各戦場で運用された。日本では1942年（昭和17年）4月18日に米海軍が陸軍航空軍の爆撃機（航空母艦より発進）によって実施した日本本土に対する初めての「ドーリットル空襲」を行った機体として本機は著名である。

「ミッチェル」の愛称はアメリカ陸軍の将校ウィリアム・ミッチェル准将にちなむ。

なお、派生型を含めた総生産数は約10,000機。J型は、B25の最終生産型で、12.7mm機関銃×12基（弾数計4,600発）、爆弾搭載4,000lbs（1,814kg）となる。翼は中翼配置であり、レシプロエンジンを2基装備しており、尾翼は双垂直尾翼（twin tail）である。



写真12 現存するB25-J型機

4 第345爆撃機群団 第498戦隊の概要

米軍が沖縄に上陸して以降、日本軍の組織的抵抗が終わる前から米軍側は旧日本軍基地を整備し、6月には本格的に米陸軍極東航空軍が移駐を開始した。

極東航空軍は、第5・7航空軍から成り、所有する爆撃機のタイプ別に8個軍団を構成していた。1945年8月1日段階での、該当する第5航空軍の編成は工藤洋三氏作成の第1表の通りである。

松橋空襲を行った第345爆撃機群団は第498～501戦隊の4個隊で編成され、全て機体はB25で伊江島基地である。

8月7日攻撃は工藤氏資料「第5航空軍の統計表・戦隊名 (Squadron)」では第498・500戦隊で川尻への攻撃と並行して行われた。個々部隊での個別目標は継続調査中である。

なお、墜落機はハワイ経由で南大西洋地域 (SWPA) に配備されており、エンジン番号「R-2600-29」である。部隊の前任地はフィリピン方面である。



写真13 沖縄移駐前の第345爆撃機群団「B25機」による船舶攻撃

所属部隊			機種	基地
第5爆撃機集団	第43爆撃機群団	第63戦隊	重 B-24	伊江島
		第64戦隊		
		第65戦隊		
	第38爆撃機群団	第403戦隊	中 B-25	沖縄
		第71戦隊		
		第405戦隊		
		第822戦隊		
	第345爆撃機群団	第498戦隊	中 B-25	伊江島
		第499戦隊		
		第500戦隊		
		第501戦隊		
第5戦闘機集団	第3爆撃機群団	第8戦隊	軽 A-26 A-20	沖縄
		第13戦隊		
		第89戦隊		
	第8戦闘機群団	第35戦隊	P-38	伊江島
		第36戦隊		
	第35戦闘機群団	第80戦隊	P-51	沖縄
		第39戦隊		
	第58戦闘機群団	第40戦隊	P-47	沖縄
		第41戦隊		
	第348戦闘機群団	第69戦隊	P-51	伊江島
		第310戦隊		
		第311戦隊		
		第340戦隊		
夜間戦闘機	第418夜間戦闘機戦隊	第341戦隊	P-61	嘉手納
		第342戦隊		
写真偵察	第421夜間戦闘機戦隊	第460戦隊	P-61	伊江島
		第421夜間戦闘機戦隊		
写真偵察	第6偵察群団	第71偵察群団	F-5, F-7	沖縄
		第71偵察群団	B-25	伊江島

表1 第5航空軍の編成 1945年8月1日段階 工藤洋三氏作成

5 当日の戦闘詳報

この記載は、「戦闘詳報 (Albelt Gruert・アルベルトグリュエ大尉の証言を軸とした) 要約資料を古牧昭三氏が和訳したものである。

1945 (昭和20) 年8月7日、九州中西部の熊本県松橋町への攻撃命令を受け、沖縄伊江島を離陸、天候快晴、視界良好。攻撃目標約3マイル (約5 km) 手前地点で、全機攻撃態勢に入った。

私 (訳者註: Albert Gruert大尉) は44-31300 (訳者註: Neal・ネール大尉) 機の左後方にいたが、彼の機がやたらと動きがゆっくりしているように見えた。攻撃は北から入り南方向へ離脱することになっていたが、攻撃地点通過後、対空砲火 (※高谷注: 松橋駅裏の塚原区にあった高射機関砲陣地) を避けようと急旋回したため、指定されたポジションから離れてしまった。44 -31300機は南方向へまっすぐに飛んで行った。

同日午前10時55分、直ちに2機の搜索機が派遣された。奄美大島からトカラ列島の西、屋久島のからさらにターンして北西方向、甕島南西端、野母崎を経て、最後は五島列島付近まで搜索したが発見することはできず帰路に着いた。

基地局からは不明機44-31300機に「現在地および進行方向を知らせよ」の無線コールが繰り返されていたが応答はなかった。搜索任務にあたったのは第577爆撃隊のRobert P. Cornwellおよび第214爆撃隊のVincent J. Biunnoの2機である。



写真14 鏡川河口の墜落現場想定地 図12 古牧氏推定値 (1948.3.5GHQ撮影・国土地理院許可済み)

6 機体の墜落地点

※八代市文化振興課吉永明氏、人権NPOちなもい有馬信一氏、高谷和生の調査による。

□墜落地点は、現鏡町漁港付近、鏡川右岸と想定される。松橋駅より約9kmの直線距離。

□当時国民学校2年生のM・M氏（鏡町海洲）は、以下内容を伝え聞いた。

「全搭乗員は墜落前に、鏡川河口（現八代不知火線・338号線の横江大橋）から約200m上流の八代鏡町津口（かがみまちつぐち・旧鏡町）附近にパラシュート降下したところを捕獲された。晴れ渡った上空からパラシュート5個が開いて降りてきた。住民が集まって来て、手にした棒などで米兵を殴りつけた」との話を聞いた。

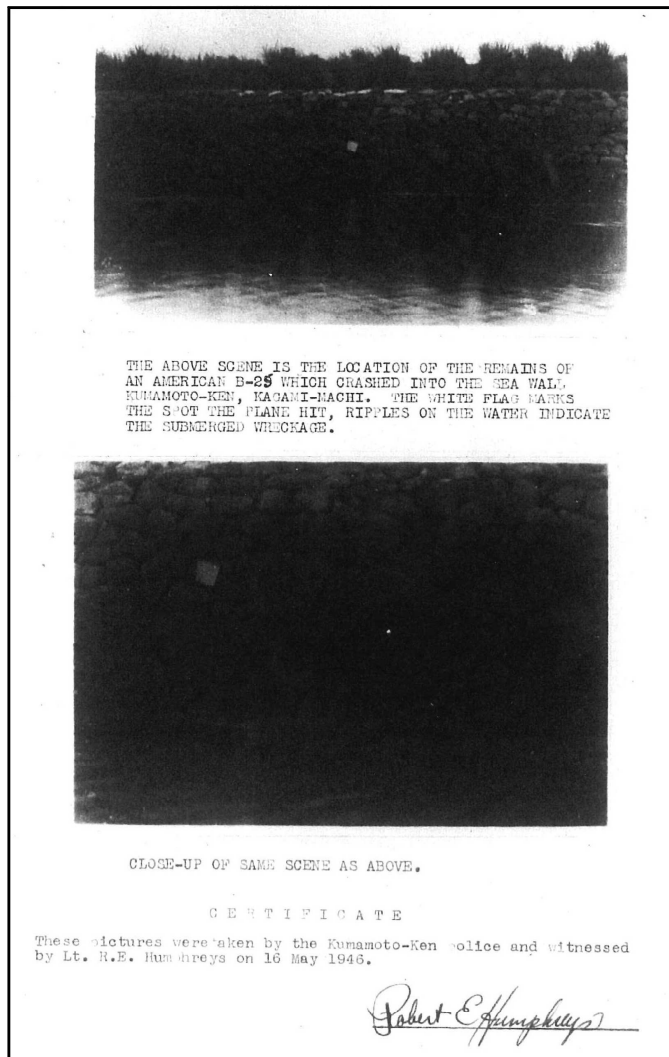
□当時国民学校4年生K・A氏は、鏡町自宅前の本通りで妹と一緒に「八代警察署鏡派出所に連行される**複数米兵（2～3人）を目撃**した」、「周りには国防婦人会の約20人がもんぺに鉢巻きを締め、薙刀を持つなどして遠巻きにしていた」「**若い米兵達は、後ろ手に縛られ、顔から血を流していた**」「初めて米兵を見たので怖かった」と証言された。



写真15 米兵連行の様子を証言されたK・A氏
八代市鏡町在住・86歳

写真16 自宅のあった場所前の本通りで証言されるK・A氏

旧鏡町の本通りは海側から東西に走り、鏡国民学校へ抜け、有佐駅に至る。この道を米兵達は連行された。



資料1 墜落機に関する米側資料
大分県深尾裕之氏提供・添削

<上段>

上の添付写真は、熊本県鏡町の護岸に墜落した米国爆撃機B-25の残骸がある場所である。白い旗は、飛行機が墜落した場所を示しており、水の波紋が水没した機体の残骸を示している。

<下段>

上記と同じ場所を拡大する。

1946年5月16日 R.E. Humphreys
sshoui立会いの下、これらの写真は熊本県警察によって撮影された。

7 鏡川墜落機搭乗員の処刑

POW研究会福林徹氏資料を要約転載

その後、捕虜は熊本憲兵隊本部で取り調べを受けたのち、福岡西部軍司令部へ列車で連行される。途中、荒木・筑紫駅付近で米軍機による銃撃（著者註：米軍機銃撃は「西鉄筑紫野駅銃撃事件」1945年8月8日11時30分）を受け、連行中の憲兵1名が死亡する。幽閉されたのち15日に油山で処刑された。

1945年5月頃以降に西部軍司令部に収容された飛行士40～41人は、「日本人市民に対する無差別爆撃の罪」の理由で6月20日（第一事件）、8月10日（第二事件）、8月15日（第三事件）に3回にわたって処刑された。この事件を通称「西部軍事件」という。

搭乗員斬首事件（GHQ報告書第420号 再審記録第288号）

裁判の期間：1948年10月11日～12月29日

8 「西部軍第三事件」の現地特定と当時状況

本場所の特定は、POW研究会古牧昭三氏による想定箇所

8月15日「玉音放送」の後、福岡市南郊の油山の山林で、証拠隠滅のため生き残っていた17人を斬殺。司令部よりトラックで福岡市郊外の油山雑木林に連行し、一人または複数人単位での処刑が行われた。遺体は近くの火葬場に運び、夜半までにすべてを処理を終えた。

鏡町墜落機乗員5名は山林の中央部の西側段差のある箇所一群となり、それぞれ目隠しをされ西向きに座らされていた。なお、本図は裁判資料のS・Y証言の図である。

処刑場は、福岡市南区松原6丁目1番地付近の松原運動公園と福岡市葬祭場「刻の森」の間の山林である。

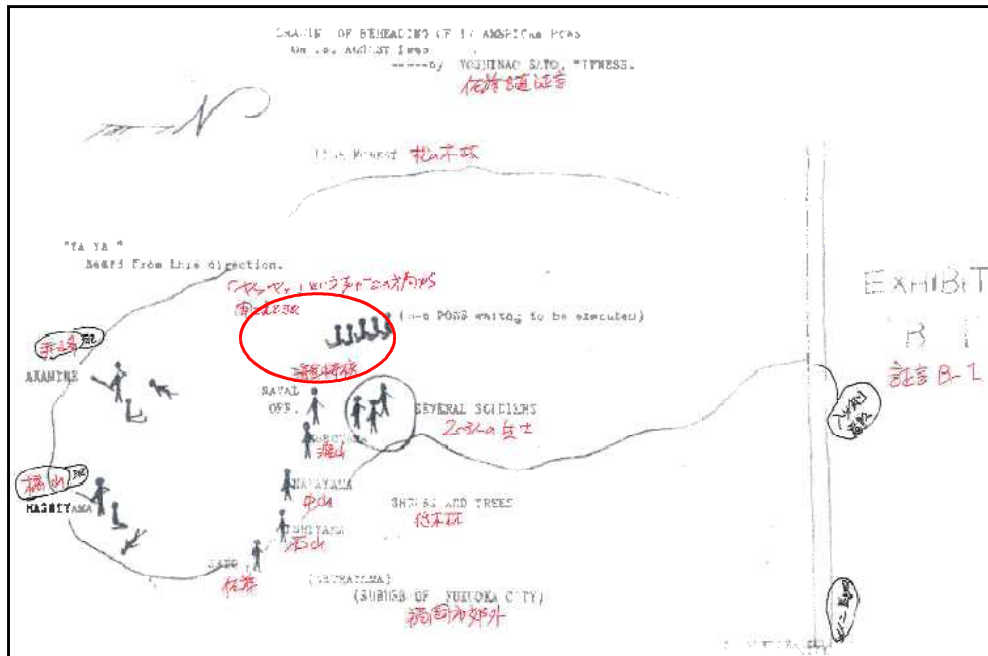


図13 S・N証言での処刑現場解説の添付図面
 写真17 処刑現場の山林へ至る旧道路。松原運動公園駐車場の標記
 図14 1947年4月16日撮影の航空写真。中央部が処刑の想定場所
 図13・14は古牧昭三氏提供

9 横浜BC級戦犯裁判

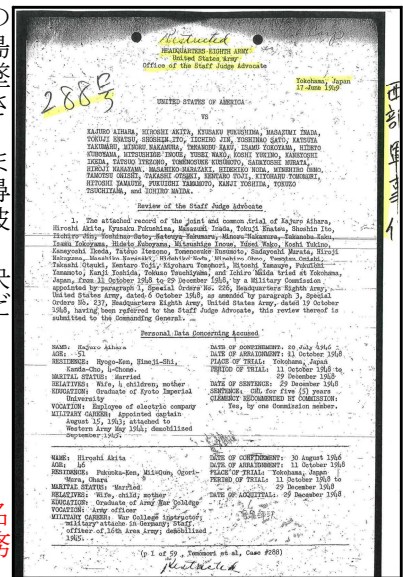
この項は、POW研究会福林徹氏資料を要約転載

戦後の米軍の取り調べに対して、捕虜飛行士が1人もいないことの説明に困った西部軍では、九大生体解剖事件の捕虜など10人は広島へ送られて原爆で死亡、一部は東京へ空輸される途中、飛行機が撃墜されて死亡などと隠蔽工作を行ったが、結局は全てが白日のもとにさらされた。

戦後、関係した日本軍将校、兵士たちは戦犯として起訴された。また、Army Recovery Team(第108登記団)による徹底した関係者の尋問、証言に基づき調査したが遺骨に発見には至らなかった。よって彼ら犠牲者は行方不明扱いとなった。

なお、日本人戦犯対象になったのは33名である。内8名に絞首刑判決が下されたが、後すべての被告が禁固、重労働等に減免された。ただし1名が獄死している。(第288号・西部軍事件)

資料2 西部軍事件裁判資料の表紙
古牧昭三氏提供



10 日本側への尋問 ※裁判資料につき抜粋

※古牧昭三氏調査内容を記載。和訳は古牧氏、文中氏名は頭文字で記銘。「JAS(米陸軍第8軍司令部法務官事務所)資料 1949.6.17 横浜裁判資料」

IV 総括

1 「松橋空襲」の位置づけ

総称としての「松橋空襲」は、昭和20年7月27日、8月7日、10日に旧松橋町・不知火町を主な攻撃目標として、米陸軍第5航空軍及び第7航空軍が行った、駅・鉄道橋・道路等の交通要所を主とし、市街地等を副対象とした「交通インフラ攻撃の空襲」である。

1945年11月1日より開始される九州上陸「オリンピック」作戦に向けての攻撃である。

なお、「松橋空襲」は宇土市や熊本市南区川尻への一連の空襲としてとらえられる事ができる。

2 戦争遺跡「永代橋梁」

宇城市松橋町豊崎、不知火町高良の大野川に架橋された旧国鉄「永代橋梁」橋脚・橋台等には、確認できただけでも「松橋空襲」時の機銃弾跡2箇所、爆弾痕跡39箇所が遺存している。爆撃は7月27日、8月7日の2回行われ、残された橋梁は交通及び軍事に関わる「戦争遺跡・遺構」である。

3 松橋空襲での鏡川河口への米墜落機

松橋空襲時に墜落した機体は、第5爆撃機集団第345爆撃機群団第498戦隊の「B-25J型機」である。機体は何らかの原因で八代海・鏡川河口に墜落した。搭乗員5名は捕縛され、鏡町市街地を歩いて連行され、怪我の治療を受けたのち、熊本憲兵隊司令部へ送られた。さらに西部軍司令部に連行される途中、西鉄筑紫駅銃撃事件に遭遇する。

4 墜落機の米捕獲搭乗員

日本側捕虜となった5名の搭乗員は、8月15日午後福岡市南区郊外の「油山」で、公的には「日本市民に対する無差別爆撃の罪」とし、実際には「証拠隠滅」のため処刑された。これに関わった日本軍将校・兵士はB・C級戦犯として起訴された。

本調査に際しては古牧昭三氏、工藤洋三氏、深尾裕之氏、吉永明氏、有馬信一氏、分部三友氏、夏目信弘氏、上村真理子氏、村井真輝氏、矢加部和幸氏、国崎潤氏の資料提供・協力を得た。

[附 1] 参考資料および文献等

- ①「GHQ資料 Investigation Division Reports (No.1728)」
- ②「JAS(米陸軍第8軍司令部法務官事務所)資料」 1949.6.17 横浜 裁判資料59枚
- ③POW研究会「本土空襲の墜落米軍機と捕虜飛行士 西部軍事件 福林徹レポート」
- ④『終戦秘録』九州8月15日 上野文雄著 白川書院 1975.6.15
- ⑤「極東航空軍による九州の各都市へのナパーム弾攻撃」『九州・山口地区空襲・戦災・戦争遺跡を考える交流集会 第6回宮崎大会報告集』
- ⑥『大東亜戦争当時松橋小学校生徒 戦争体験記』昭和20年卒業生喜寿記念誌
- ⑦『新宇土市史 資料編第4巻』近代・現代
- ⑧『新宇土市史 通史編第3巻』近代・現代・年表
- ⑨『日本合成化学工業株式会社 五十年史』
- ⑩『塚原地区』『不知火町史』不知火町史編纂委員会
- ⑪『戦争体験記 大東亜戦争当時松橋小学校生徒』昭和二十年卒業生喜寿記念誌

⑫『記憶のなかの色紙』夏目信弘

⑬『郷土誌 燎火第 18号』宇城市教育委員会・文化財保護審議会

[附 2] 連絡先・西部軍事件等

Ⅲ－8、Ⅲ－10については、福岡市在住の「POW研究会・古牧昭三（こまきしょうぞう）氏」に、調査資料等の提供を受けました。本報告はその内容に全面的に依拠した。改めて感謝の意を表します。

なお、西部軍事件については、古牧昭三氏を中心にBC級戦犯裁判に関するGHQ資料、国立公文書館調査資料および横浜弁護士会様の資料調査、研究、分析を終えた時点で正式発表の予定です。



連 絡 先

□くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク 代表 高谷 和生
個人携帯 090-1513-5528

Eメール takayanagi912@yahoo.co.jp

HP URL <http://www.kumamoto-senseki.net/>



くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク